於ける支那の史學思想」加藤博士「大日本史と支那史學」併東氏「洋學と歴史觀」鈴木氏「最近に於ける我が東洋史學の支那に與へし影響」今井博士「西洋史學の太邦史學に與へたる影響」前掲藤本氏「僧傳の編纂と其形態」等に見られるが如き本邦史學と外國に於ける史學との交流の問題である。此の二連の論說は各寄稿者の偶然的な一致によるのではなく、本書編纂者の意識的な方針に基づいてゐるものがあるであらう。もし果して然りとすれば、本書の編纂に當つて如何なる點が強く意識されてあつたかを察することが出來ると思ふ。

要するに本書は、多くの論說を集めながらも、尙ほ日本史學史が有するあらゆる問題を提出し之に解決を與へつゝ全體の見透しが可能なる樣に仕組まれた點に特色がある。これに依つて讀者は一方的に偏することなき太邦史學史の本流を知りうるのである。

（菊判上下二册、一五〇二頁、昭和十四年五月、東京富山房發行、定價七圓五十錢）（高瀨重雄）

東西交涉史論

史學會編

明治二十二年設立せられ、全國に千五百の會員を擁する史學會が今般創立五十週年を記念せんが爲に、姉妹篇「本邦史學論叢」と共に發刊せられたのが本書である。執筆者三十一名、總紙數千四百有餘頁、誠に盛なりと云ひつ可きである。

題して東西交涉史論といふ、書名から來た自然の結果かも知れぬが、この書が從來の漢籍型論叢とは著しく趣を異にした點が感せられる。第一には細かき考證よりも全般的な叙述が多く見當ることである。卽ち古代より近世迄、殆と歴史年代の全體に亙つての問題を取扱つたものに、卷頭白鳥博士「東西交涉史上より見たる遊牧民族」はじめ、秋山謙藏氏「東西交涉史上の香料」三上義夫氏「東西交涉史上に於る科學」の三篇がある。白鳥博士の論文は、博士の持論たる東洋の歴史は南北・土着遊牧民族の對立を樞軸として廻轉する說を更に一歩進めて、北方民族が南下を阻まれた時に西方に轉じて、東西の交涉を惹起する大勢を述べられしもの、三上氏の論文は古代東方人と希臘人との科學史上に於る位地に始まり、日本と支那とが科學に對する態度の相違を論ずるに終つてゐる。秋山氏は東西の民族が印度南洋に產する香料への欲求が世界の地圖を現今の如く變化せしめたりと說く。所論中、胡椒の如き調味料と、麝香の如き芳香料とを併せて香料と稱し、その欲求する所の主方向が何れにありやを分析されず、蘇木・犀角・眞珠までが特に混入してゐるのは些か奇異に感ずる。

歴史年代全般に亙らぬでも、相當長き一時代に亙つての研究は、原田淑人氏「正倉院御物を通して見たる東西文化の交涉」、岩井大慧氏「元代の東西交通」其他十數編に及び。これも從前の漢籍論叢に見なかつた現象である。吾人は斯かる概觀的研究を歡迎し、特に本書の如き過去五十年間史學界の總決算の意味を持つ論叢には最も適當なるを信ずる者であるが、同時に微に入り細を穿つ底の研究も益々盛でありたいことを希望する。

更に本書に見らるゝ特異な現象は近世史關係のものが斷然多きを占むることであらう。卽ち歐人東漸の時代以後に關する者が渡邊世祐氏「我が史料より見たる戰國時代東西交涉史」、村上直次郎氏「ポルトガル交通が我國に及ぼしたる影響」を初め、二十篇に及び、それが時には現時の問題にも說き及んでゐる。新見吉治氏「米國の東洋政策」、內藤智秀氏「日土條約締結史上の問題」、村川堅吾氏「東西洋交涉史上に於ける現代日本」、和田淸氏「所謂江東六十四屯の問題について」等がその例である。最後の論說は露國の黑龍江北岸及び烏蘇利江東の占據は共に欺瞞に出で、殊に愛琿對岸の所謂江東六十四屯の沃地は、淸朝・中華民國時代より現滿洲國に於ても嘗て所有權を拋棄したることなきを論證したるものである。學者の近世史への關心は、恐らく歷史學の正道であつて、若しも之が時局によつて齎された現象であるならば、寧ろ遲きを恨むと云つて宜しからう。

それが編輯者の意圖に基くや、或は執筆者が期せずして合致したる結果かを知らぬが、本書が Reference book として多分の效用價値あることも見逃せぬ特徵である。殆ど全部の論文が程度の稍高い史學概說の參考資料として參照し得る外、村川堅太郎氏「エリユトラ海案內記に見えたる紀元一世紀の南海貿易」の中、各港輸出入品の一覽表の如きは、どの譯本にも缺いてゐるもので便利であり、板澤武雄氏「日蘭文化交涉に於ける人的要素」、幸田成友氏「カロンの譯譯した武鑑の復原」、岡田章雄氏「近世初期に於ける主要なる輸入物資について」などは用ふる人によつて利用價値の高きものとならう。

三十一篇の論文を一々批評するはをろか、內容の一端をも紹介することは、狹き紙面にては思ひもよらぬ。依て止むを得ず以上の如く計數的觀察を試み、現下史學界の動向を尋ねんとした。我國史學界が、史學會創立以後今日に至る迄目覺ましき發展を遂げたことは、本書を手に取る者が、誰しも感ずる喜びによつて知られよう。併し乍ら吾人は之を以て望月の缺けたるなき滿足と安心に浸り得るや否や。若し夫れ望蜀の念を以て讀後の感を云へば、一抹の漠然たる不安と淋しさを抱かすものは、實にペルシヤ・イスラム研究の不振といふ一事であらう。

古代より中世にかけて世界文化の源泉であり、東西交涉の中心であつたペルシヤ・イスラム世界の研究は、吾人に對して猶敎ふる所のもの多かる可きを信ずる。而して之が眞髓は極東學者、極西學者か片手間にやつたのでは、到底摑み得ぬものがあらう。その道には必ずや、其道專門の學者を要する。日本全國の帝國大學に未だイスラム學專門の講座が置かれぬ現狀は何とかして打開せねばなるまい。瑞西の如き東京市より人口の少ない國にも相當のアラビヂンが居るに比して、我國のそれは餘りに寂寥である。斯かる間にあつて、本書の中に只一篇、小林元氏の「ザンヂュ考」を得たることを特に多とする。數十年の後、再び東西交涉史論が發刊さるゝであらう時、イスラム學の立場より東西交涉を論じたる研究が少くも十篇を數へんことを念願しつゝ筆を措く。〔宮崎市定〕

×　×　×　×